認知症になっても安心して暮らせる社会を

2023　OCTOBER
No. 519
10

月刊 POLE－POLE（スワヒリ語）

ぽ～れ ぽ～れ

ゆっくり　やさしく　おだやかに

「ぽ～れぽ～れ群馬県支部版」
わたぼうし
No.482

認知症の人と家族の会　理念

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、
人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穏に続けられなければならない。
認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、
人として実りある人生を送るとともに、
認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

巻頭言

新しい治療薬レカネマブのお値段

新しいアルツハイマー型認知症の治療薬レカネマブの値段を決めるための議論が、12月に結論を出すことを目途に進められています。

どんなにすばらしい薬でも、手が届かなくては絵にかいた餅です。日本の医療制度では、薬価が高額になった場合、患者の年齢や所得に応じて自己負担の上限を設ける「高額医療費制度」が適用されます。レカネマブもこの対象となります。

私も別の病気ですが、この制度の恩恵を受けている身です。まさに日本が戦後築き上げてきた医療制度の素晴らしさを日々痛感しています。

厚生労働省は、当面、レカネマブの投与対象者は限定的だとみています。対象が軽度者に限られる、検査可能施設が少ないなどの理由からです。しかし、薬の効果や前述の条件が変わり、対象者が増える可能性もあります。日本の医療制度を守り、患者の皆さんの期待にも応える、冷静で温かい結論を出していただくよう願ってやみません。

目次

・巻頭言　新しい治療薬レカネマブのお値段　1頁
・手記　支援の網の隙間から　こぼれ落ちてしまった　2～3頁
・報告1　長野原町介護家族支援講座　3頁
・〈わが家の認知症ケア手帳〉㊶　渡辺医院院長（当会顧問）　渡辺俊之　4頁
・報告2　電話相談2023上半期実績　4頁
・編集後記　4頁

これからの予定

●11月12日（日）渋川つどい
10時～12時　渋川市中央公民館

●11月18日（土）館林つどい
10時～12時　館林市中部公民館

●11月26日（日）県央つどい
10時～12時　県社会福祉総合センター7階701会議室

安中市介護家族支援講座

●11月11日（土）10時～16時
安中市役所3階　306会議室

電話相談

◎群馬県支部（群馬県からの委託事業）
認知症の人と家族のための電話相談
027（289）2740

◎本部フリーダイヤル
0120（294）456

X(旧 Twitter)
やってます

発行：公益社団法人 認知症の人と家族の会　〒602-8222　京都市上京区清明町811-3　岡部ビル2F　http://www.alzheimer.or.jp
群馬県支部　〒371-0843　群馬県前橋市新前橋町13-12　群馬県社会福祉総合センター7階
TEL：027-289-2740　FAX：027-289-2741　Mail：misato@xp.wind.jp　相談等にもご利用ください。

手記
支援の網の隙間からこぼれ落ちてしまった
～コロナに感染してしまった祖母との生活

山口怜生

認知症の要介護2の祖母と生活しています。

主介護者は、祖母の娘である母ですが、家庭の状況としては、父親が障がい者一級で介護にはあまり協力できない状況と、母親も体調が悪く入退院を繰り返しているような状況です。

私自身も、組織の一員として勤務をしていることから、日常に必要な手伝いを家族に提供することが叶わない状況です。そのような状況の中、まだ5類移行前の段階で、祖母がコロナ感染症に罹患しました。

〈「徘徊」もある祖母の生活〉

祖母は利用サービスとしてはデイサービスとショートステイで在宅生活を継続しています。

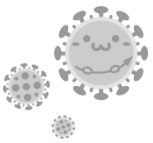
きっかけは様々ですが、最近は昼夜問わず家を出て、本人なりの目的で歩いて行ってしまう、いわゆる「徘徊」と呼ばれることも起きてきていました。夜間不明になり、警察に保護していただいたこともあります。両親も体調がすぐれないため、祖母は介護サービスを活用してどうにか生活を保っている状況でした。

〈感染は祖母から両親へ拡大〉

そこで、コロナに感染してしまったのです。その当時はデイサービスなどでもコロナが流行り、感染者が爆発的に増えていた時期でした。一番最初に祖母に症状が出始め、母親、そして父親へと感染が広がっていきました。

サービスで生活をつないでいる祖母がサービスを使えなくなると、家族で見るしかありません。しかしその家族もコロナにかかってしまい身動きが取れなくなってしまいました。

症状として、祖母は軽く、その他の家族は高熱が出ている状況でした。デイサービスやショートステイはコロナに罹患したという事で、利用はできなくなりました。



〈高熱の家族が微熱の祖母を介護〉

施設や、施設内感染している場合、施設内で陽性者を見ていただいたり、献身的なデイサービスでは工夫され、支援してくれた施設があると後から聞きました。しかし、すでに家族が陽性になったときには契約もできるはずがなく、どこにも頼ることができず、情報も少なく、高熱状態の家族で見るしかありませんでした。

家族は高熱が出ていましたが、祖母本人は翌日から微熱となり、自覚症状はなく、デイサービスへ出かけるつもりになっていました。何度説明をしても覚えられないため、準備をしたり家の中をウロウロしている様子がありました。

母親が「コロナ感染しているんだよ」と祖母に話しても、「そんなウソを言って！自分のことは自分がよくわかる！まったく具合なんか悪くない！病院になんか行ってない！嘘ばかり言うな！」と興奮してしまい、家庭内でも療養してもらうという事が大変な状況でした。

〈外との接触を断たれた10日間〉

家族も体調が悪く、横になっていたタイミングで、コロナ感染がある中、家の外に出て行ってしまいました。

いないことに気が付いた家族が、無理をして探しに行き、どうにか見つけることができました。感染爆発が全盛期の中、コロナに罹患した高齢者が自覚症状なく徘徊をしていた事実もある事を知っている人は少ないかもしれません。

本人はコロナだが、入院するほどの状態ではなく、家族も感染して外部との接触も断たれ、サービスも使えない状況で10日間を過ごしました。

〈支援の網からこぼれ落ちた感覚〉

普段ライフラインとして使っているサービスがコロナによって絶たれてしまい、どうすることもできない状況でした。

コロナ感染があっても訪問してくださる訪問介護事業者もありますが、必要時には契約していなかったり、祖母の場合は、一時的な支援だけではなく、継続した見守り支援が必要でした。

報告1
今年度最初の認知症介護家族支援講座
長野原町にて開催

群馬県支部では毎年4～6回、県内各所で家族支援講座を開催しています。

内容は、①介護サービス利用の知識を身に着ける、②認知症の人の心を理解するワークショップ、③認知症についての理解を深める、の3つのミニ講義と参加者どうしの交流という組み立てです。

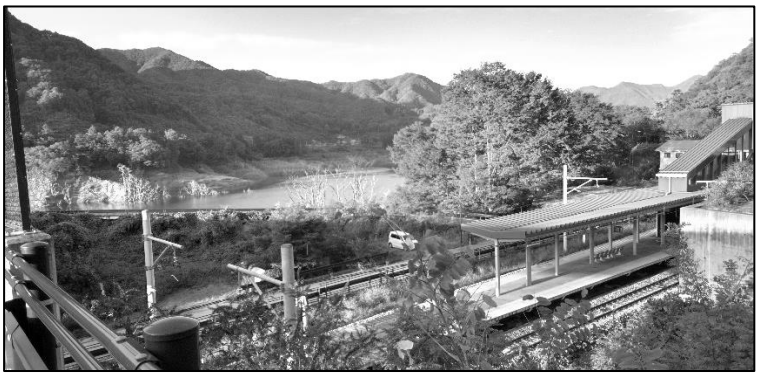
今年度1回目の講座を10月14日（土）、新しい長野原町役場で開催しました。八ッ場ダムが完成し長野原町をはじめ沿線一帯は大きく変貌を遂げ、役場も知らなければそれと気づかないほど様変わりしていました。

北毛地区は、島村副代表をはじめ周辺に居住する世話人たちの協力で、各自治体とも連携して様々な取り組みを行っています。そのため広報も行き届き、長野原町と近隣の東吾妻町、中之条町から4家族と1人の合計9人の参加者がありました。

3家族が、夫が認知症のご夫婦、1家族は妻が認知症のご夫婦、お一人でのご参加は夫の母を介護されている女性でした。

共通する点も多くこれからつながりを重ねて、同じ介護者として支え合える関係になっていくことが期待できるように思われました。

ダムの完成までには紆余曲折のあった地域ですが、今は新しい環境に馴染んでいる空気に時の流れを感じました。



〈八ッ場あがつま湖と川原湯温泉駅〉

宿泊や入院の手段はとれず、日中のみ見てくれるところも、十分には探すことができず、ありませんでした。

介護が必要となった高齢者を社会全体で支える仕組みが介護保険という事ですが、今回このコロナウイルスというものによって、支援網の隙間からこぼれ落ちてしまった感覚でした。

〈そんな中での家族の思い〉

在宅で介護をしていくといったときに、それを支える仕組みがなければ、介護のすべてを行うことは難しいです。そのような状況なら施設に入ればいいという専門職もいますが、それは、家族関係のこと、それには至れない、それぞれの家族の思いを軽視しています。

ハウトゥーのように支援を提案し、つなぐだけの仕事だったり、家族を教育してやろうという、上からの専門職、共感・傾聴という言葉を安易に使いながら、本人視点になったつもりになっている方もいます。

本人を支え、家族を支えるという事、同じ方向を、近い方向から一緒に眺めてくれる、伴走してくれるような専門職の方々がいてくれたら、どれだけ心強いかと感じます。

〈支援者と「家族の会」の連携〉

何かにつなげ、結果を出し、あたかもやっているという支援ではなく、答えは出なくても、きちんと向き合い、寄り添ってくれる、そんな支援があれば、たとえどのような状況でもどうにか乗り越えていけると思います。

これが、同じ境遇を持つ「家族の会」の人たちがいるからこそ頑張れているのも事実です。支援者にそこまでしてほしいというのは、大変かもしれません。だからこそ、支援者が「家族の会」と連携し、居続ける、あり続けるサポートの必要性を知っていただけたらと思います。

幸い、私は知っていたので、同じ境遇の方々とつながり、状況は変わらないけれど、とらえ方は軽くなり、家族の余裕を持って聞くことができました。

解決策が欲しいだけじゃない時もあるし、今回のように解決しないこともあります。そういうときに、あり続ける支援や、頼る先、いわば依存先を増やす、その選択肢の一つとして、「家族の会」を知ってほしいと感じた経験でした。

渡辺俊之の〈わが家の認知症ケア手帳〉㊶

「言葉」で協力引き出す

渡辺医院院長（精神科医、当会顧問）　渡辺俊之

八十代の認知症の妻を介護するＡさんは、娘さんが介護に協力してくれずに困っています。介護には過去の家族関係が影響しますが、親子が進んで協力し合う間柄でなかったようです。娘さんは看護師の仕事で忙しく、時間も限られています。

米国の催眠療法家のミルトン・エリクソンは、「相手の無意識に働きかけて協力を引き出す」という言葉の使い方を提唱しました。「ミルトン・モデル」と呼ばれるこの方法論の一部を紹介しましょう。

一つは「相手の立場を理解する」言葉。Ａさんの場合、例えば「病院もコロナで大変だろう。おれも血圧が高いけど頑張るよ」と言えば、娘さんに思いやりの気持ちが生じやすくなります。

次は引用。「〇〇さんの娘さんは週末だけ実家に戻り、介護を手伝っているらしい」などと第三者の話をすることで、「自分も工夫すればできるかも」と自主性を引き出せる場合があります。

もう一つは時間関係を表す「時制」の言葉。協力を得たい場合、その内容が具体的である方がうまくいくことが多いです。相手の生活習慣などを考慮して「家に帰る前に紙おむつを買ってきてくれないか」「明日、出かける前にごみを出してほしい」など、相手の行動の「前」と「後」を意識するのです。

長く一緒に過ごした家族でも、言葉一つでコミュニケーションは変わります。今回、紹介した内容がすべての家族に当てはまるとは限りませんが、試してみても良いかもしれません。

報告２
「認知症の人と家族のための電話相談」2023 年度上半期（４～９月）の実績

2019 年度から群馬県の委託を受けて実施している電話相談の今年度上半期の実績がまとまりましたので、ご報告します。

●開設日数：124 日
●相談件数：150 件
●相談者：女 108 人　男 42 人
●最多：娘が実母を介護　38 件
　次　：妻が夫を介護　21 件
●相談内容（多い順）
　①相談者の心身　75 件
　②認知症の症状　49 件
　③人間関係　18 件
　④医療関係　15 件
　⑤介護保険等サービス　12 件
●対応
　①傾聴等精神的支援　91 件
　②症状への対応方法　44 件
　③情報提供　29 件

件数は、昨年度下期とほぼ同数で横ばいの状況でした。励まされる情報を目にしました。

群馬県が 2023 年１～２月に行った、「県民意識調査」の中の、「認知症についての相談場所」への回答です。①かかりつけ医（70.4％）、②地域包括支援センター（29.9％）、③認知症疾患医療センター（25.4％）と順当な結果が示されたのに続き、⑧番目に、私たちの「認知症の人と家族のための電話相談」（7.2％）が入っていました。全回答者 990 人の内 70 人の方が相談場所に選んでくれたことになります。

これを励みとしていっそうの広報に努めたいと思っているところです。

〈編集後記〉

秋の気配が濃厚になってきました。

今月号の手記は、９月のシンポジウムでの会員さんの発言を紹介しました。皆さんからのお便りもお待ちしています。

（田部井康夫）